

神戸新聞

未来を担う ①

社説

企業の撤退・高齢化による市場縮小・
疲弊する地方都市でいま地域が置かれた
状況の本質を見つめ、仕事を通して変え
ようという動きが目立ってきた。

地元の人を応援する。インターネット
放送局「ジーオ」(明石市)の番組には
そんな思いが込められている。企業、ミ
ュージシャン、漁業など地域の魅力を伝
える人を、長井克憲さん(36)は力メラで
追い、動画を配信する。

地域再発見を掲げるジーオは、播磨地
域などで業務展開する王子印刷が新事業
部として2年前に立ち上げた。一押し
の番組は「ひょうごの在来種保存会」が振
り起す三田つとや姫路の海老手など兵
庫固有の農作物の物語だ。

「誰かに食べてもらいたいという生産
者の思いから始まる食のつながり。ほん
まの豊かさはこれだと思った」。そう話
す長井さんは畑で野菜作りを始めた。

農家が種を遺り育ててきた伝統野菜な
どには風土と文化が詰まっている。画一
化が進む時代に残っていたこの地域資源
に目を向ける若者が増えている。

姫路市の池島耕さん(35)が保存会に参
加したきっかけは山根成人代表がある講
演で語った一言だった。

「こんな時代にしてしまい、若い人に
は申し訳ない。そんなことを言う大人
には初めて出会った。

地域再発見

成長こそが幸せへの道と、利益を求め
続けるうちに、環境破壊、膨大な借金、
ツアタラけの国になっていた。山根さん
は反省の思いを述べてから種の魅力につ
いて語る。

手掛かりは地産地消

池島さんは派遣社員の雇用が拡大した
「ポスト団塊ジュニア」世代だ。非正規
のまま30代になった友人も少なくない。
保存会の運営に関わるのは暮らしが根元
から揺らぐ時代にあつて、土に根を張っ
て成長する種に自立した生き方のヒント
を感じたからだ。

「この時代がほんでも進んでいける
んじゃないか。唯一そう思えるのが『農』
なんです」

味にほれた姫路の海老手や自家消費野
菜を作りながら広告デザイン業を営む。
同じように農と職の両立を追求する仲間
とツイッターなどで魅力を発信する中で
料理店や消費者へと輪は広がってきた。

食は人と人をつなぎ、地域にお金の流
れを生む。先の見えない時代に地産地消
は地域を形づくる確かな手掛かりとな
る。そのことにもっと目を向けたい。

池島さんが気掛かりなのは原発だ。母
は原発運動に携わってきた。「地震列
島で原発を続けてはいけない」。母が言
ってきた言葉をかみしめ、福島の原発事

若い感性が魅力を引き出す

故を最後の警告として受け止めた。
農の根本である土を汚染し、地域と人
のつながりをすたすたにする。福島の現
実を見て、地域に根ざした人の営みとは
相いれない存在と池島さんは感じる。
「僕らの世代は国も年金もあてていき
ないと思う。だからせめて原発だけはや
めてほしい」



地元を応援するネット番組＝明石市

かす力をどう育んでいくか。
神戸ビーフなどのブランド戦略を手掛
ける星加ルリコさん(36)「神戸市」は教
育の重要性を訴える。
星加さんは6甲アイランドを国際教育
の島にする「平成の出島計画」という大
胆な提案をする。子どもが学校や店舗な
どで英語のみで生活する環境にし、賛同
する教育や生活産業を誘致する。

ヒントは東日本大震災後に神戸に起き
た変化した。安全を求めて首都圏から教育
熱心な家庭が国際学校が多い神戸に移っ
てきた。もともと外国人が多く暮らして
きたこのまちの生活文化こそが最大の地
域資源という。

併せて必要なのが、小学生の山村留学
だ。春夏秋冬の自然と食をたっぷり体験
することを義務化する。「日本の宝は田
舎に眠っている。人間として自立し始め
る年代に日本というものをインストール
(組み込む)すべし」という。

食をはじめ海外で評価される「日本ら
しさ」を日本人自身が十分に語れない。
まず手を付けるべき課題はこのギャップ
にあるのではないか。

逆風の中で確かなものを採した末、地
域の魅力にたどり着く。そんな若者の姿
には、困難な時代を生き抜いていくヒン
トがありそう。地域の魅力を引き出す
若い感性を大切にしたい。

日本を伝える力育む

グローバル化が進む中、地域資源を生